

## 今、私が目指す看護師

私の母に癌が見つかり、入退院を繰り返した一年間の闘病生活。その中で母だけでなく、私までケアをしてくれた看護師さんがいる。

今から3年前、母は抗がん剤治療を受け、病気と闘っていた。薬の作用で大量に嘔吐し、髪の毛がごっそり抜ける母。私は毎日見舞いに行ったが、日に日に変化する母の姿が怖く、耐え切れずに泣いてしまうこともあった。

その私に「大丈夫」と声をかけ、励ましてくれたのは母の担当看護師さんだった。病室を怖がる私の手を取り、「お母さんのこと心配だよ。一緒に部屋に入ろうか」と促してくれた。病室では外の景色の話や地元ならではの話で場の雰囲気を和ませてくれた。

母の意識がなくなり、お別れの時がやってきたときも、看護師さんが私のすぐそばにいてくれた。そして、「お母さんが寂しくないように、手をさすってあげて。声もかけてあげよう」と私の手を握った。私は戸惑いつつも看護師さんと共に母の手をとり、さすり、「私だよ。今までありがとう」と声をかけた。それで悲しみがなくなることはなかったが、それでも、母に想いを伝え、お別れすることができたように感じた。

母の死から時が経ち、少しだけ分かったことがある。あの時接してくれた看護師さんは、母の看護だけをしていたわけではないということだ。丁寧な言葉遣いや笑顔で接してくれること。忙しくても必ず部屋を訪れ、「何かあったら言ってね」と声をかけてくれること。何より、どんなときでも気にかけてくれる看護師さんがいるという安心感で、どれだけ心が軽くなっただろう。あの時にあの看護師さんがいてくれたということだけで、母の死に直面する私の悲しみは幾分か和らいだ。私の心の近くに看護師さんがいるという実感が私のケアにつながっていたのだ。

「悲しい」「不安だ」という言葉を発さなくても、心情を察し、ケアを行ってくれた。そっと背中をさすってくれる。黙ってそばにいてくれる。何もしていないように見えても、患者さんや家族の心情を察して心に寄り添うことは、人に大きな安心感を与えるのではないかと私は思う。その人の心を見つめ、必要であろうケアを考え、行う。そうしたケアが患者さんと、またその家族も共に支えることに繋がるということに気づかされた。

今の私にはあの時の看護師さんのように、「相手の心に寄り添った看護」を実践することができない。だが、私どんな時でも、患者さん、家族の方の心に寄り添おうとすることを忘れないでいたい。そして、言葉を越えてケアができるような、あの時出会った看護師さんのような看護を目指していきたい。